

日本語と私
——日本語教師としての半世紀余を振り返る——
A look back of my half-century teaching experience
as a Japanese language teacher

李澤森

歳月は瞬く間に過ぎ去り、振り返れば半世紀の時の流れも一瞬のようです。

今から半世紀余りさかのぼった1974年5月、香港政府は石油危機による深刻なエネルギー不足を避けるために約半年間にわたって実施していた灯火管制を解除しました。この措置により、夜間に授業を行う日本語学校をはじめとする夜間の経済活動が再開されることになります。

香港は「東洋の真珠」や「ショッピング天国」として知られ、世界中から多くの観光客が訪れています。そこで観光業界や日本人観光客を対象とした店舗では、日本語を話せる人材が切実に求められるようになり、これが戦後初の日本語学習ブームを間接的に促す要因となったわけです。

(1)

香港における日本文化の浸透は、1970年代初頭に放送されたテレビドラマに端を発します。『サインはV』の岡田可愛、『姿三四郎』の竹脇無我、『二人の世界』の栗原小巻、『Gメン'75』の丹波哲郎らは当時多くの人々の憧れの的でした。1980年代に入ると、『赤いシリーズ』や『おしん』などの作品が大きな話題を呼ぶことになります。

また、『ドラえもん』、『キャプテン翼』、『美少女戦士セーラームーン』、『聖闘士星矢』、『ドラゴンボール』などのアニメ作品は、多くの香港の若者にとってかけがえのない青春のアイコンだったのです。1980年代以降、日本の楽曲をカバーした広東語のヒットソングも数多く誕生しました。

経済状況の改善に伴い、香港市民はより高い物質的な満足感を追求し、価格の手頃さと優れた品質、充実したアフターサービスを備えた日本製の家電、カメラ、自動車が欧米の製品に取って代わることとなり、香港社会に溢れるようになったのです。

70～80年代に成長した世代は、前の世代を縛っていたような古い思想に左右されることなく、日本文化に強い関心を抱くようになったことから、第二次日本語学習ブームが巻き起こることになりました。

日本語学校が雨後の筍のように開校される一方、私立校のみならず高等教育機関にも日本語コースが開設され、多くの若者の日本語学習意欲に火を点けることになります。

なかでも香港中文大学崇基学院は早くも1967年に日本語部門を設立し、1991年には高等教育機関で初となる日本研究学科の創設に踏み切っています。香港理工学院では1976年に日本語ディプロマ課程が開講され、香港大学も1978年には語学センターに日本語課程を設置しました。同じ年に、各大学の日本語教員を中心にして、香港日本語教育研究会も設立されたのです。

(2)

1984年、国際交流基金と日本国際教育支援協会が共同で初の日本語能力試験を実施したところ、香港社会から大いに歓迎され、高い社会的評価を得ることになります。

1980年代後半から1990年代初頭にかけて、中国の改革開放を背景に日本の商工業や金融業が大挙して香港に進出したことから、日本語人材の需要が一段と高まりました。このような動きに応える形で、香港大学文学院と香港城市理工学院はそれぞれ1985年、1987年に日本語課程を設置しています。さらに1988年になると、香港貿易発展局がビジネス日本語コースを開講することになりました。

1990年代には木村拓哉、福山雅治、酒井法子らが出演する日本のテレビドラマに加え宮崎駿や手塚治虫のアニメ作品などが香港のエンタメ界を席卷し、任天堂のスクロールゲームも世界的なブームを巻き起こしました。当時、それらの海賊版が氾濫しており、これが日本のサブカルチャーの普及をさらに後押ししたことから、第三次日本語学習ブームを招き寄せるわけです。

2005年、韓国ドラマ『宮廷女官チャングムの誓い』が香港で初放送され、大ヒットを記録しました。これをキッカケに日本のドラマに代わって韓流ドラマが一大ブームとなり、日本においてバブルが崩壊したことも相まって、日本の魅力に陰りが見え始めます。それに追い打ちを掛けたのが2011年の大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故であり、日本経済は深刻な打撃を受け、国際的評価は大きく損なわれてしまいました。

リーマンショックに端を発する2008年の世界金融危機は、世界中の経済に甚大な被害を与え、在来型の航空会社も大打撃を受けました。その一方で新しいビジネスモデルであるLCC（格安航空会社）が台頭し、海外旅行がもはや贅沢ではなくなり、気軽に日本を訪れる機会も増えました。こうして日本を「第二の故郷」と見なす香港人がもはや珍しくはなくなりました。なかには年に6～7回も訪日する人も見受けられるようです。

日本政府観光局の統計によれば、香港人は訪日外国人の中でも常に上位に位置しており、その日本への愛着の深さは明らかでしょう。

2012年、香港試験及評価局は日本語を含む6種の言語を大学入試に相当する中学文憑試験(DSE)の科目に加えました。報告によれば、日本語の受験者数は6言語中最多とされ、この点からも香港における日本語学習熱の高さが分かるというもの。言い換えれば、日本語学習熱は決して冷めることなく続いているのです。

2025年からDSE試験にはCambridge Assessment International Educationの日本語の試験の代替として日本語能力試験(JLPT)が採用されるようになったことにより、小中高生の受験者が著しく増加しています。

2020年初頭、新型コロナウイルスの世界的流行により国際的に経済活動は激変してしまいました。その結果、インターネットは生活に不可欠なインフラとなり、交流、娯楽、購買、仕事のあらゆる面でオンライン化が進みました。感染拡大が最も深刻だった時期には、オンライン授業が学習の継続を支える唯一の手段となりました。

日本の食文化は既に香港に深く根付き、近年では日本料理店が街中に溢れ、高級な懷石料理から庶民的なラーメンはもとより回転寿司に至るまで、多くの香港市民に親しまれています。

円安に後押しされ品質に定評のある日本製品の競争力が回復したことから、一時は韓国製品に奪われた市場を取り戻しつつあります。こうした変化の中で、「人気（人気）」、「放題（食べ放題）」、「玄関」、「物流」、「直送」などの日本語表現が中国語に取り込まれるようになりました。

(3)

地理的に太平洋プレートとユーラシアプレートの境界に位置することから、日本は地震が頻発する国です。この半世紀の間にも、1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震、2024年元日の能登半島地震など、甚大な被害と犠牲を伴う大地震が相次ぎました。しかし、日本人は災害に直面しても天を恨まず、冷静さと秩序を保ち、世界の人々を深く驚嘆と感動させています。

2022年にカタールで開催されたサッカーワールドカップでは、日本代表がグループリーグでドイツ、スペインを逆転で撃破し、世界のサッカーファンから大いに讃えられました。しかし、それ以上に称賛を集めたのは、選手たちが試合後にロッカールームを清掃し、サポーターがスタジアムのゴミを拾うという美しい行動でした。

国家の強さは必ずしも経済力や軍事力にあるわけではなく、国民の資質にこそ現れると言われています。

この点において、日本は間違いなく世界の先頭を走っています。過去半世紀を振り返ると、日本は経済の浮き沈みを経ながらも、その魅力は一向に衰えず、高品質な製品は依然として多くの人々を魅了し、心のこもったこまやかなサービス精神は今なお多くの称賛を集めています。歴史的建造物も良好に保存され、海外からの多くの観光客の心を捉えて放しません。

(4)

社会情勢の変化に伴い、海外留学を志す人々が増える中で、欧米やオーストラリア、ニュージーランドのみならず、日本留学も魅力的な選択肢として注目されています。

日本語と私
——日本語教師としての半世紀余を振り返る——

日本政府は高等教育の国際化を促進するため、2008年に「Global 30」プロジェクトを開始し、13の有力大学において英語による講座を開設し、海外からの留学生を積極的に受け入れています。この措置により、卒業生は日本の一流大学の学位取得が可能となるだけでなく、日本での生活を通じて日本語と日本文化を習得でき、将来母国に戻って活躍する際にも、日本に留まって働く際にも大きな利点となります。

大学に限らず、美術、美容、IT、デザイン、製菓などの高いレベルの専門学校も多く、留学生にとって多様な選択肢が用意されています。また、労働力不足の解消を目的として、日本政府は2019年4月に特定技能制度を改正し、介護、飲食、建設、ビル清掃、ホテル、自動車整備、造船、農業など14分野において外国人労働者の受け入れを拡大しました。

2020年の新型コロナウイルスの流行時、日本が大連に送った支援物資には「青山一道同雲雨、明月何曾是兩鄉」という唐代の詩人・王昌齡の詩句が記されていたことから、日本人が示す礼節と雅な心に多くの人々が感銘を受けました。

どうやら日本に学びに赴くことで、私たちが遠い昔に忘れ去ってしまった宝物を再発見できるかもしれない。それがまた、日本語と日本文化が秘めた魅力でもありそうです。そんな日本語が持つ不思議な磁力に引き付けられるまま、私は半世紀余に亘って日本語を学び、教え、研究を続けてきたような気がします。この思いは、これからも変わることはないでしょう。

(2025年8月1日記)